

出会い

山梨県 北杜市立甲陵中学校 3年
石黒 楓子

「でも誰だろう 何だろう
私に私をくれたのは？
限りない世界に向かって私は呟く
私 ありがとう」

これは、私の大好きな、谷川俊太郎さんの「ありがとう」という詩だ。

この詩に出会うまで、「私に私をくれたのは誰だろう」なんて、考えたこともなかった。「私、ありがとう。」自分がここに存在することに対する感謝だ。こんな詩はなかなか思いつくものではない。この、何か心に訴えかけてくるような詩に、衝撃を受けた。

私は昔から詩が好きだったわけではない。谷川俊太郎さんという人物を知ったのも、ごく最近の事だ。私は、読書をするのは好きだが、ふだん読むのは小説ばかり。詩集などほとんど手に取ったことが無い。では、どこでこの詩と出会ったのか。きっかけは、中学二年生の国語の教科書だった。その最初のページに載っていたのが、「明日」という詩だった。授業で読み進めていくうちに、だんだんと素晴らしさに気付いていった。

その時から、私は谷川俊太郎さんの詩が大好きになった。詩というものは、文章のように思いを書き連ねることはできない。でも、だからこそ、これはどういう意味なのだろうと考えさせられる。その面白さのとりこになった。

この出会いがあるまでは、私にとって教科書とはそれほど重要なものではなかった。暇な時に、あえて教科書を読もうとは思わない。授業で使うから、面倒だけど読まなければいけない、というくらいの認識だった。私の他にも、同じように思っている人は多いのではないだろうか。

もちろん、教科書は勉強に欠かせないものだ。これが無ければ、学校の授業はスムーズに進まず、十分な理解もできないだろう。家で復習をする時にだって必要だ。それに、教科書は税金で作られている。つまり、多くの人のお金が使われているということだ。だからもちろん、粗末に扱ってははいけない。大切にしなければならない。もし今、全ての教科書が消えたら、絶対に困ると思う。

そう分かっているけども、教科書と私の好きな小説や漫画とを比べられたら、やはり自分の好きな小説や漫画の方を選んでしまう。それは、教科書を無料で手に入れられるほど裕福な、日本という国で暮らしているからかもしれないが、なぜこんなにも大切だと分かっているのに、選ばないのか。答えは簡単。あまり面白みを感じないからだ。小説を読んでいる時のようなわくわく感や、その世界から抜けられなくなるような気持ちは味わえない。

だが、詩との出会いをきっかけに、私の教科書に対する見方は少し変わった。教科書は、嫌でも読まなければいけないからこそ、たくさんの発見があると知ったからだ。今まで自分が興味の無かった分野も読むことで、新たな出会いがある。そこから自分の興

味が広がっていくかもしれない。私が詩と出会ったのがまさにそうだ。

その年の夏休み、私は「音楽創作力くらべ」という、自分で作曲をする課題に取り組んだ。その時に使ったのが、冒頭で紹介した「ありがとう」だった。もし教科書で「明日」と出会っていなかったら、私は詩に興味を持つことも無く、課題詩を使って作曲していただろう。しかし、谷川俊太郎さんという人物を知ったことで、彼の詩をもっと読んでみたいと思い、曲にできそうな詩をインターネットで探した。そこにまた新たな出会いがあった。そして冬。私は「ありがとう」の曲で、音楽創作力くらべの最優秀賞を頂くことができた。この受賞は、自分にぴったりの詩を選んだからこそ、できたことだと思う。

「ひとつの小さな約束があるといい

明日に向かって

ノートの片隅に書きとめた時と所

そこで出会う古い友だちの新しい表情」

私達の毎日は、出会いであふれている。そしてそれは、今までの自分の物の見方を変えてくれる。日々の出会いの積み重ねが、新しい未来へと繋がっていくのだろう。私は、教科書を、今までよりも少し好きになれた気がした。

素晴らしい出会いに、「ありがとう。」